

学位論文の要旨

所属	三重大学医学部（皮膚科学）	氏名	磯田 憲一
主論文の題名 Treatment of cloth with a fabric softener ameliorates skin dryness			
主論文の要旨			
<p>【はじめに】乾燥肌は、角質層の含有水分が損なわれた状態を言うが、その原因は、アトピー性皮膚炎や老人性皮脂欠乏症で見られるような内的要因により皮膚バリア機能が障害され水分が失われる場合と、外環境からの化学的、物理的刺激など外的要因により角質層が傷害され水分が奪われる場合がある。</p> <p>衣類柔軟剤は衣類の繊維の表面を滑らかにし皮膚と繊維との間の摩擦を軽減することから、摩擦刺激による角質層の傷害を防止する機能が期待できる。しかし、柔軟剤が乾燥肌を改善する効果を科学的に評価した報告は今までほとんど無い。</p> <p>【目的】今回、私たちは柔軟剤処理Tシャツを着用することによる乾燥肌に対する改善効果や安全性を評価するため、乾燥肌を持つ健常人男性40名（22～66歳、平均46.7歳）に対して無作為二重盲検試験を行った。</p> <p>【方法】対象は無作為に2群分けし、20名には柔軟剤処理された綿Tシャツを28着支給し4週間毎日着用させ、他方の20名は未処理のTシャツを同様に4週間着用させた。なお、試験開始7日前より0日目まで全員に未処理のTシャツを着用させた。</p> <p>評価日は0、7、14、28日目とし、それぞれ皮膚科専門医による皮膚乾燥症状の視診、被験者の自覚症状（かゆみ、痛みを伴うかゆみ、赤み）のアンケート、角質水分量、経表皮水分蒸散量そしてダーモスコープ拡大鏡による皮膚表面解析により評価を行った。</p> <p>【結果】柔軟剤処理Tシャツ群において、被験者の肩では7、14、28日目の3ポイントで、側腹部においては14日目に角質水分量の有意な経時増加がみられた。一方、未処理Tシャツ群では有意な経時変化はなかった。</p> <p>さらに、0日目に測定した角質水分量の少ない群と多い群に分け層別解析を行ったところ、少ない群で28日目に柔軟剤処理群と未処理群の群間で有意差がみられた。</p> <p>視診による乾燥肌の評価では、被験者の肩において28日目に柔軟剤処理群と未処理群の群間で有意差がみられた。</p> <p>被験者の自覚症状、経表皮水分蒸散量そしてダーモスコープ拡大鏡による皮膚表面分析においては両群間で有意差はなかった。</p> <p>本試験を通して、明らかな有害事象はみられなかった。</p> <p>【考察】現在までに乾燥肌に対する柔軟剤の効果の評価した試験は非常に少なく、逆に好ましくないとした論文もある。私たちが行った長期間にわたる無作為二重盲検試験はこの分野で初めての試みであり、柔軟剤処理された衣服を着用することで皮膚の乾燥が予防できることが有意差をもって確認できた。</p> <p>さらに層別解析では乾燥肌の程度が強いほど柔軟剤による改善効果がよりよく現れることがわかった。この解析では、肩の測定値で群間有意差が得られたが、側腹部では得られなかった。その理由として、肩の摩擦刺激はTシャツの繊維によるものに限定されるのに対して、側腹部では外の空気に触れたりズボンのベルトで刺激される機会が多いため柔軟剤処理の効果が十分に得られなかったものと推察する。</p> <p>以上、乾燥肌に対する柔軟剤処理Tシャツによる改善効果とその安全性が確認された。</p>			

(注) 2, 000字以内にまとめて記入すること。